

小栗上野介情報77

ホームページHttp://tozenji.cside.com/ Eメール: tozenji@clock.ocn.ne.jp



2020令和2年 6月
発行:東善寺 住職 村上泰賢
群馬県高崎市倉渚町権田169
〒370-3401
Tel・fax:027-378-2230
〒振替00120-1-406206東善寺

【小栗上野介の濡れ衣】

「小栗上野介は退職後も抗戦準備に奔走」は

和暦と西暦の読み違いから

濡れ衣…勝部真長 (かつべみたけ) 著『勝海舟』に

「小栗上野介は慶応四年一月十五日に勘定奉行を退職後も武器購入に奔走していた。フランス人ビグエーの明治元年2月6日付の小栗上野介宛書簡に《小銃千挺と弾薬八万発》の請求書が残っている」(勝海舟研究家・お茶の水女子大学名誉教授勝部真長著『勝海舟』下p154・PHP出版・平成4年・要旨)とある。

小栗は勘定奉行を免職後もまだ主戦論者として武器の購入に奔走していたのだから、西軍に殺されるのは当然、とする「小栗有罪説」(=西軍は正しかった)の根拠になる。はたして本当にそんなことがあったのか

不 審

このころ小栗上野介は…慶応四年一月十五日に勘定奉行及び陸軍奉行・海軍奉行を罷免されると、一月二十八日には権田村への「帰農土着願」を幕府に提出、翌二十九日に許可を得ている。問題の2月6日ごろは、江戸で権田村への移住準備に入っていた時期。

1、これから家族を連れて上州の山村に江戸から庭の植木やお茶の苗を運んで移住帰農する準備をし、用人塚本真彦も幼児を含め家族連れで移住しようとしている時期の言動に照らし、上記の勝部氏の話を加えれば「家族連れで庭木まで運んで、いくさに出かける」と、つじつまの合わない話になる。

2、幕府の公職を解かれた後、「小銃千丁弾薬八万発購入」の裁量をする権限や資金があるだろうか。

西暦と和暦の読み違いで濡れ衣

勝部氏の文章は、次の本の史料を元にして書いている。

法学博士尾佐竹猛著『国際法より観たる 幕末外交物語』(大正15年)、および同『幕末外交秘史考』(昭和19年)…にある書簡史料(塩田三郎訳と推測)で、勝部氏の著書には掲載してない▼ *仏語書簡原文は上記2書に写真で掲載あり

《フランス人ビグエーから小栗上野介宛の書簡》

横浜 1868年2月6日

小栗上野介閣下

江戸

大臣 殿

小生は三浦敬之助氏により小生に届けられたる手紙を受け取るの光栄を有す。小生はこの役人にすでに述べたごとく貴下ご要求のシャスポー式小銃千挺弾薬の引渡しは八万ドルの額に対して引き換えにあらざれば、なすことを得ず。小生は貴下の望みを容るることあたわざるを悲しむ。しかれども小生が貴下に渡したる仕切り書は、小生が貴下に前もって指示せられたる送金なくして貴下のお話ありし交付の責任をとるために非常に重要なり。

敬意を以って F. ビグエー

この書簡の「1868年2月6日」という日付に注意されたい。

当時日本では和暦(太陰暦・旧暦)、西洋では西暦(太陽暦・新暦)を用いていたのはご存知のとおり。日本在住歴の長い外国人は西暦と和暦の日数差を考慮し、手紙に「1868年〇月〇日即日本〇月〇日」(1860年〇月〇日イコール日本では〇月〇日)と

西暦・和暦を併記する人もいた。

このビグエーの書簡のように、西暦だけの場合はもちろん西暦の日付である。

では「西暦の1868年2月6日」は和暦では何日か、調べると「慶応四年一月十三日」で、小栗が勘定奉行その他役職を免職になる二日前である。勝部氏はとんでもない誤解をしている。(参照:『日本陰陽暦対照表』下)

この十三日は小栗上野介は勘定奉行・陸軍奉行・海軍奉行在任中で、大坂城から逃げ帰った將軍慶喜を含め幕府として西軍と戦うか恭順するか決めかねていた最中のこと。

新政府の青写真は示さないまま攘夷討幕を主張し、東進する西軍との戦いに備え、武器を調達していたのは在職中の幕府責任者の職務として当然のこと。

しかも上記の書簡は「銃はお金と引き換えで」と引渡しの条件を伝えるものだから、その発注は当時の交通運輸事情から見てこれよりも数ヶ月以前と考えられる。

銃器の発注も受取りの手配もすべて勘定奉行・陸軍奉行並在職中の当然の仕事であるのに、勝部氏が「退職後も武器購入に奔走して

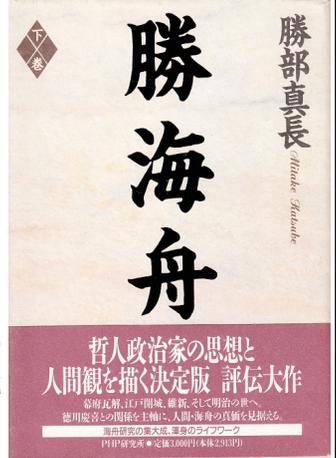
▲退職後に移住を準備した観音山邸址に開鑿した観音山用水が今も流れる



いた」と書くのは、和暦と西暦の日数の差を無視して年号だけ「1868→明治元年」とし、小栗上野介にマイナスイメージを植え付けた乱暴な話である。

尾佐竹氏につられたか

勝部氏の引用の元となった尾佐竹猛氏も「以て小栗上野介の決意を見るに足りるだろう」(『幕末外交物語』p488)と思わせぶりに書いているから、やはり2月6日はそのままに年号だけ1868年を慶応四年に入れ替えて解釈し《退職後も抗戦の「決意」》としたのであろう。しかし勝部氏がそれにつられてしまっただけの単純な話では終わらない。→裏ページに続く



▲勝部真長著『勝海舟』下巻

小栗上野介像の矮小化で 勝海舟礼賛

国立大学名誉教授の勝部氏は、尾佐竹博士が西暦と和暦の日数差を無視しているのを受け、年号だけ1868年＝明治元年とし、西暦の日付をそのままくっつけて「明治元年2月6日」だから「退職後」と論じていることが判明した。

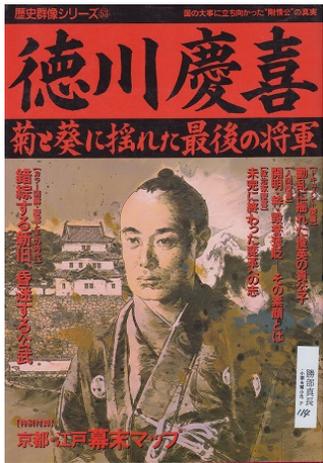
わかってみれば単純かつお粗末な間違いだが、さらに次のように書いているのを見ると、ただの間違いではすまなくなる。

(※下記の太字は史実無根・根拠不明の箇所)

「上野介は…**榎田村に帰って土地の博徒をいじめたりした**から…、**官軍に密告され…つまらぬことで処刑されてしまっ**た」(『勝海舟』下p183)

「勘定所で不用となった千両箱の払い下げを受け、これに銃器・弾薬を入れ…大砲まで持って榎田村へ移った。…会津藩からの密書を奪われて…大音竜太郎の手で斬首された。養子又一と二人…二分金百五、六十両づつ肌身に付けていた。…金時計も身につけていた。…夫人は信州に逃れ…」(『勝海舟』下p124) 別の本でも

「**観音山に陣地を作り…博徒を酷使し…密告され、大音竜太郎(だいおん→おとりょうたろう)の手で…斬られた**」(『歴史群像徳川慶喜』p121学研)



▲『歴史群像 徳川慶喜』学研・1997年12月

陣地や博徒の話は史実無根であり、裁判も取り調べも罪状認否もない斬殺は**処刑**ではない。大砲は川船で後日に倉賀野河岸に着いたのを運んだ弾のない飾り物であることは周知のこと。密書や千両箱、二分金、金時計、信州などの話は聞いたことのない新説である。斬首した人物は**大音竜太郎**ではない。

これら錯誤のほとんどは雑誌『旧幕府』(第4巻七号・明治33年7月)に拠っていると思われるが、『旧幕府』の小栗上野介論は、江戸にいただけの旧幕臣による虚実取り混ぜの無責任な後世の回顧談だから、これを引用する場合は取捨吟味し現地やほかの

史料と校合することが欠かせない。

問題はこのあとに続けて

「勝は江戸育ちで博徒の扱いに慣れ人の気持を見抜くことはうまい…人間理解は抜群である」(『歴史群像徳川慶喜』p114) としていること。

江戸育ちの勝海舟が優れていると主張するため、田舎者の小栗上野介が「**榎田村に帰って**」と、実際は神田駿河台生まれの江戸っ子小栗忠順を上州出身とする誤解を付け足し、小栗を評して「**組織(幕府とか藩とか〇〇隊とか)を守るために国家を忘れて**」(『勝海舟』下p154、『徳川慶喜』p114) しまった人物の例として虚説を以て小栗の人物像を矮小化し、勝海舟を称賛している。

年号の使用に不自然な作意

細かく言えば、年号が慶応から明治元年に替ったのは慶応四年九月八日からだから「明治元年2月6日」という日は存在せず、勝部氏のこういう歴史を論ずる文章の場合は正確を欠く。一步譲って、もしすべてさかのぼって「明治」で統一するなら、退職年号も明治元年一月十五日とすべきであろう。

冒頭(表ページ)に引用の文中で「**小栗上野介は慶応四年一月十五日に勘定奉行を退職後…明治元年2月6日付けの小栗上野介宛書簡に《小銃千挺と弾薬八万発》の請求書…**」としたのは、慶応四年一月十五日～明治元年2月6日(実は一月十三日だが)の實質わずか三週間足らずを、慶応～明治と書いて「小栗上野介は退職後たいそうな日にちが経過してもなお銃器の購入に奔走」という錯覚イメージを読者に抱かせようとした、と疑ぐられても仕方あるまい。

二度殺された小栗上野介

「小栗上野介は二度殺された。無実の罪で斬首され、さらに明治以後は名前と業績の無視抹殺で殺された」と言われる。

明治以降、天皇の政府軍に対抗したから幕府側の人物は逆賊、明治維新が近代国家を造り、幕府政治は暗黒時代、とする幕府政治矮小化に基く歴史教育が続いた。そして現代の学者の一部にもその歴史観で、現地を歩かないまま小栗上野介に濡れ衣を着せ、名前と業績を矮小化し抹殺する学風が続いている。

(以上、2000平成12年10月「上毛新聞」オピニオン・に加筆)

小栗公本墓への参道 改修工事

募金のお願い

寺の裏山にある小栗公の本墓への参道がかなり荒れてご参拝の皆様にご不便ご心配をおかけしています。今秋に「参道改修工事」に取り組むこととなりました。公費補助はありませんので、工事資金の浄財をご寄進いただければ幸いです。



▲木の根が伸び崩れた石段

- ◆小栗公本墓への参道改修工事 浄財募金
- ・一口 2,000円

- ・郵便振替口座 00120-1-406206 東善寺
 - ・群馬銀行 室田支店 0398381 東善寺
- へお送り下さい。

父は御持筒頭 (おもちづつかしら)

◇小栗上野介の父忠高は新潟奉行に任せられる前に將軍を護

衛する幕府鉄砲隊長「御持筒頭」となり、同役は3人いて、ふだんは御持筒与力・同心を率い江戸城内中仕切門を警固していた。

◇絵図は1849嘉永二年三月十八日、小金原(松戸市)で將軍家慶が江戸城を午前0時出発で、2年前から準備した大がかりな日帰りの鹿狩りを行った様子を描いたもの。「御持筒頭」3名の中に「小栗又一(忠高)」の名がある。

◇この時忠高は41歳。息子忠順は23歳で「書院番」に任せられていて、鹿狩りの「追駆驛馬」役を務めた。

◇先年、東善寺所蔵の火縄銃の銃身に「小栗又一忠高造」の銘が発見され、旗本が自ら銃を鍛えていたとして話題となった。当然、この作業を忠順も見物していて、「御持筒頭」の責任と探究心から銃の製造に取り組む父のそばで、現場を踏まえて企画提起し実行する姿勢を学んだことと思われる。



▲『小金原御用掛』絵図(大塚秀郎氏蔵)

◇幕末の歴史・小栗上野介ファンの方へ

会員になってください——東善寺「たつなみ会」

倉瀨町の小栗上野介顕彰会ではさまざまな顕彰活動を行っていますが、地域の人口減で顕彰会員も減っております。東善寺の「たつなみ会」会員には顕彰会機関誌『たつなみ』を発行のつど顕彰会から購入してお送りし、誌代が顕彰会の活動資金に役立っています。また東善寺発行の「小栗上野介情報」や「東善寺だより」などで、小栗上野介・幕末関連の最新情報をお送りします。

□たつなみ会会費 年1800円 お申込み：東善寺へメールまたは電話、ハガキで

